

山梨県北杜市明野町上神取
諏訪原遺跡発掘調査概報
2012年度



2012.12

昭和女子大学人間文化学部
歴史文化学科

例　　言

1. 本書は、山梨県北杜市明野町上神取1587-1番地に所在する諏訪原遺跡の2012年度発掘調査概報である。
2. 発掘調査は、2011年8月7日から18日まで実施した。
3. 発掘調査は昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科が主体となり、山梨県教育委員会・北杜市教育委員会の指導のもと、昭和女子大学人学院生・学部学生が参加し実施された。
4. 発掘調査は、昭和女子大学大学院生活機構研究科教授 山本輝久、同人間文化学部歴史文化学科教授 小泉玲子が担当した。
5. 発掘調査は、独立行政法人日本学術振興会平成24年度科学研究費(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)研究課題名「関東・中部地方における繩文時代中期大規模癪状集落崩壊過程をめぐる研究」の補助金(研究代表者 山本輝久)、および、昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科2012年度プロジェクト予算「山梨県北杜市諏訪原遺跡の発掘調査を通じた体験型実習の実践」により実施された。
6. 本年度よりこれまで調査を実施してきた調査地区的北西側を新たな調査対象地区として実施した。
7. 発掘調査により発見された遺物は、現在、昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科において保管中であるが、正式な発掘調査報告書が刊行されたあと、北杜市教育委員会に返還する予定である。
8. 本調査概報は、調査参加学生の協力を得て出土品整理および実測図面の整理・トレースを行い、山本輝久および人学院生の原稿にもとづき、小泉玲子と山本輝久がとりまとめた。
9. 発掘調査にあたっては、山梨県教育委員会、北杜市教育委員会のご協力をえたほか、下記の方々からご指導いただいた。あつく感謝したい。
佐野 隆(北杜市教育委員会)、青谷通保、大綱信良(早稲田大学大学院)、新海達也(早稲田大学大学院修了)、植月 学(山梨県立博物館)、植月未来、額家玲美(昭和女子大学大学院生活機構研究科博士課程・相模原市教育委員会)、鷹 幸生(かながわ考古学財団)、鷹 美沙(相模原市教育委員会)、江川真渡(相模原市教育委員会)、阿部昭典(國學院大學伝統文化リサーチセンター)、早勢加菜(アム・プロモーション)、中島昇太(杉並区遺跡調査会)、鎌田夏実(玉川文化財研究所)、松木小枝・結城晶子・齊藤珠生・佐藤 薫(昭和女子大学OG)、倉橋和也(新成田総合社)

目　　次

1. 調査経緯	1
2. 遺跡の位置	2
3. 調査経過	4
4. 発見遺構と遺物	6
5. まとめ	17

挿図目次

図1 遺跡の位置	2
図2 諏訪原遺跡調査地区全体図	3
図3 調査地区全体図	5
図4 W-5グリッド 平断面図	7
図5 X-5・6グリッド 平断面図	10
図6 Y-5・6グリッド 平断面図	13

1. 調査経緯

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科は、2007(平成19)年度より、山梨県北杜市明野町上神取に所在する縄文時代中期の集落址である諏訪原遺跡の学術調査を実施してきた。これまでの5次にわたる調査の結果、縄文時代中期の堅穴住居址3軒、土坑、中世末から近世期と思われる道路状遺構等が確認され、多大な成果をあげることができた。その年度ごとの調査結果の概要については、別にそれぞれ報告済み(昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科編 2007・2008・2009・2010・2011)である。

これまで調査を実施してきた地区は、昨年、その周辺部を含めて大規模な圃場整備事業が計画され、それに伴い、北杜市教育委員会による事前の記録保存調査が2012年5月から10月末日まで実施され、多くの成果がもたらされている。このような経緯から、昨年度の調査をもって2007年度より実施してきた調査区の調査は終了することとなった。

その後、北杜市教育委員会のご尽力により、これまで調査してきた調査区の道路を挟んだ北西側の地区を新たな調査区として本年度より調査することが可能となった。調査の対象地は、上神取1587-1番地(土地所有者 藤原英治)である。なお、2004年度に、北杜市教育委員会により、1587-1及び1612番地の約1,000m²を対象として遺構の確認調査が行われ、多数の縄文時代住居跡などの遺構が確認されている。

調査にあたっては、本年度は、昨年度に引き続き、独立行政法人日本学术振興会平成24年度科学研究費(学术研究助成基金助成金)基盤研究(C)研究課題名「関東・中部地方における縄文時代中期大規模環状集落崩壊過程をめぐる研究」の補助金、および昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科2012年度プロジェクト予算「山梨県北杜市諏訪原遺跡の発掘調査を通じた体験型実習の実践」により実施することとなった。科学研究費補助金研究代表者である山本龍久が調査全期間を科学研究費により統括しつつ、調査期間約2週間を前半と後半に分けて、前半は科学研究費補助金による調査を実施し、後半はプロジェクト予算により実施することとした。

今年度の調査は、夏季休暇期間を利用して、8月6日～19日の予定で調査を実施することとなった。参加学生は、昨年と同様、大学院・学部3・4年の考古学ゼミ生に加えて、1・2年生を対象として、5月当初に参加希望者を募り、応募のあった学生から選抜して参加させることとした。このような経緯を経て、土地所有者の藤原英治氏の承諾をえて、北杜市教育委員会の指導のもと、発掘調査に至ったものである。



写真1 遺跡遠景① 塩川右岸から



写真2 遺跡遠景② 塩川右岸から 12.8.18

2. 遺跡の位置

遺跡は、山梨県の北方に位置し、山梨県北杜市明野町(旧・北巨摩郡明野村)上神取1587-1番地に所在する(図1)。標高約550m、塩川左岸の河岸段丘面に広がる遺跡で、東側には標高1700mを越す茅ヶ岳・金ヶ岳の雄大な山麓が広がり、北西には八ヶ岳山麓、南西方向には、南アルプスの山々が望まれる風光明媚な場所に位置している。これまでの調査結果によると、「茅ヶ岳山麓でも最大級の規模を誇る」とされ、「遺跡の広がりは2万m²以上および、100軒を優に超える住居址が埋蔵されていると考えられる」(佐野 1996)、縄文時代中期の大規模な拠点的環状集落址である。

これまで、明野村教育委員会により、1992(平成4)年から2003(平成15)年にかけて8次にわたる発掘調査が断続的に行われてきた(佐野 1996・2003-04)。また、昨年度は、圃場整備事業に伴い、大規模な記録保存調査が行われ、縄文時代中期の竪穴住居跡などが多数検出されている(北杜市教育委員会・大綱 2011・12)。

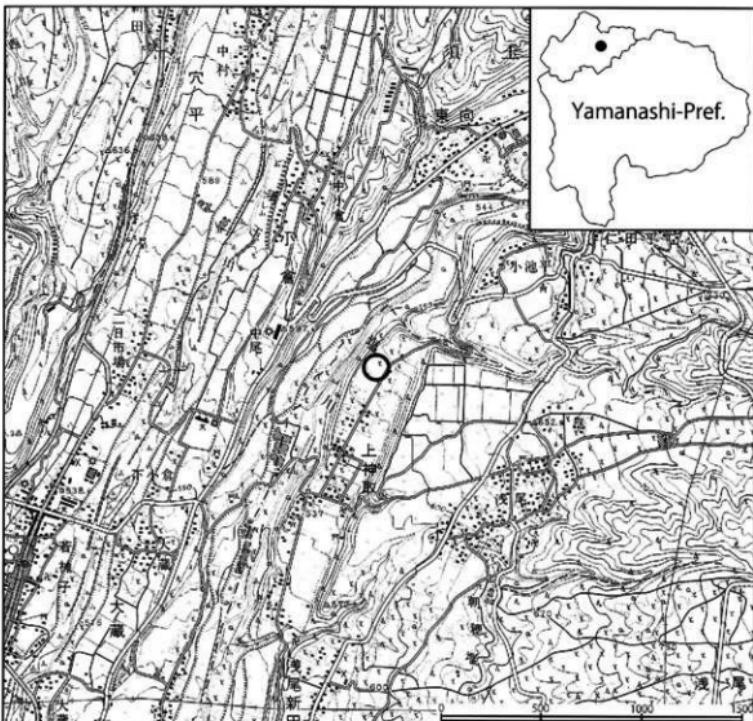


図1 遺跡の位置 1/25,000

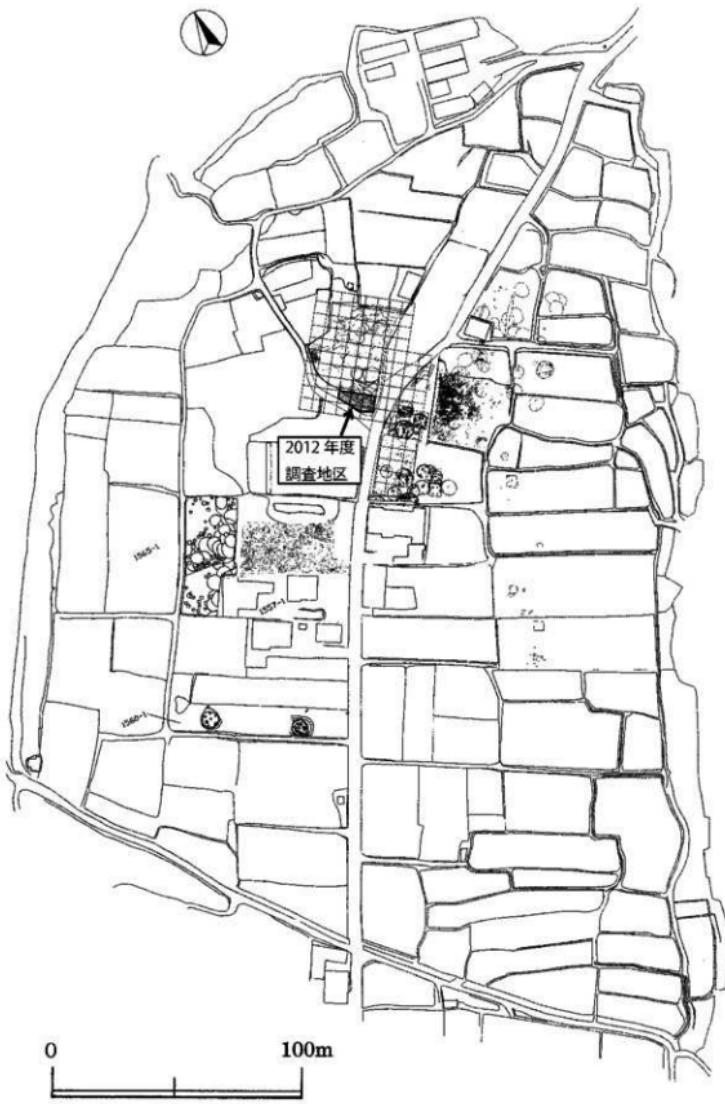


図2 館跡原遺跡調査地区全体図 1/2,000

3. 調査経過

調査に当たっては、これまで調査してきた地区に設定した $5 \times 5\text{ m}$ のグリッドを踏襲することとしたが、これまで調査してきた地区的西側に新たにグリッドを設定することとなったため、新たに東西方向は、東からZ～T列、南北方向は、北側部分については、01～04列として、調査グリッドを表示することとした。

調査初年次となった本年度は、調査対象地区の南東隅のY-5・6グリッド、X-5・6グリッド、W-5グリッドを調査区として設定を行った(写真3・4)。対象面積は約85m²である。

8月6日現地設営後、翌7日より調査を開始した。調査区のグリッド杭を設定するとともに、それと併行して、現地表面で20cm間隔の等高線による地形測量を行った(図3)。調査区の設定、地形測量を終了したあと、調査区設定状況の全景写真を撮影後、8日より調査を開始したが、表土はきわめて硬くその除去に難渋することとなった。約30cmほどの硬い表土を除去すると、ローム質土層が現れ、地山層の可能性も考えていたが、その後、このローム質土層を除去したところ、その下面から山砂層が一面に現れた。北杜市教育委員会による埋め戻しの状況について確認したところ、遺構確認後、全面に山砂を敷いたあとに、ローム質土で覆い、現在の耕作土である表土で覆っているということが判明した(写真12)。そのため、全力で山砂層を除去し、旧遺構確認面を露出させることとした。各グリッド間は、幅60cmの土層観察用のベルトをを残して調査を行った。掘削に手間取り、前半参加組の最終日の11日によろしく遺構確認面まで除去することができた。

前半組は12日朝解散し、午後後半組が参加し、13日より後半の調査を再開した。遺跡は、確認調査のさいにもとらえられているが、縄文時代面を覆うように大小の山石が多量に認められた(写真6)。この山石がどのような理由から形成されたのかは、判然としないが段丘疊層とは異なる理由から形成されたものらしい。

後半の調査は、北杜市教育委員会の確認調査での遺構を再確認するため、その上面を約10cmほど掘り下げを行った。その結果、Y-5・6グリッドからは、中世末、室代氏館跡に関係する構造遺構が南北方向に1条検出されたほか、Y-5・6グリッド、X-5・6グリッドにまたがって、中期の竪穴住居跡1(それと切り合う住居跡らしきプランも2基確認されている)、土坑敷基、W-5グリッドにも竪穴住居跡1基などが確認された。ほかに遺物の出土も多く、来年度以降の調査が期待される。調査は、18日、現状での測量、調査終了後の全景写真等を撮影し、現状面をシートを覆い、土壟で養生を行い調査を完了した(写真21)。調査期間中は、酷暑ではあったが比較的天候にも恵まれ、無事調査を終えることができた。

(山本暉久)



写真3 調査地区全景 調査開始前 12.8.7



写真4 発掘調査区の設定 12.8.7

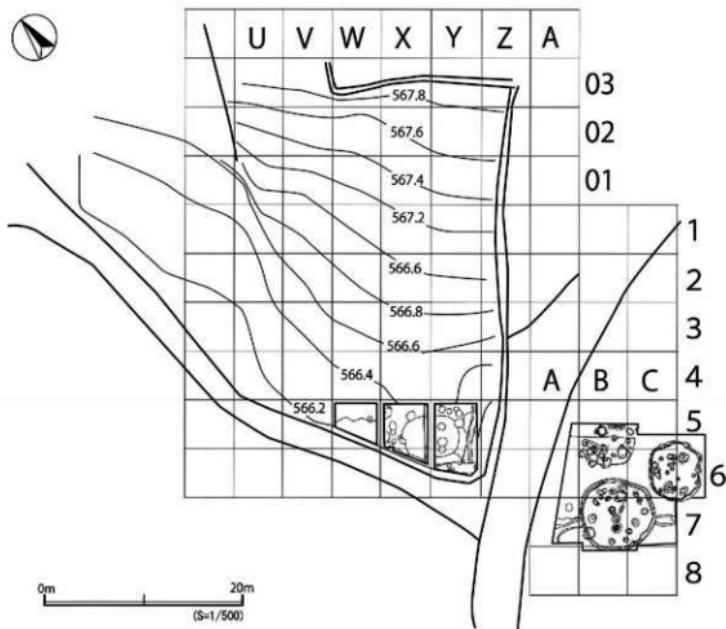


図3 調査地区全体図 1/500



写真5 調査風景 表土の除去 2012.8.9

4. 発見遺構と遺物

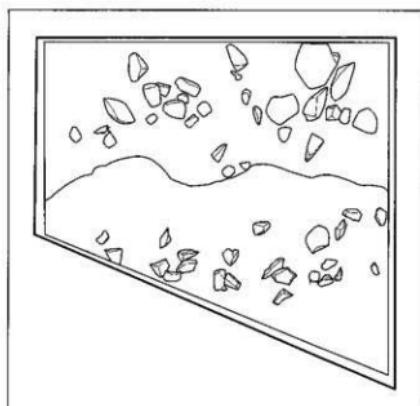
W-5グリッド(図4、写真6～8・19)

Xグリットの隣、西側に設定したグリットで、約14.7m²を調査範囲とした。表土を約30cm掘り下げたところで北杜市教育委員会の試掘調査後の埋戻し土であるローム質土が検出された。また、この表土層を掘削中に石礫が5点出土している。この内、写真19-17は茎を持つ黒曜石製石礫、写真19-16は茎を持つチャート製石礫である。ローム質土をさらに20～30cm掘り下げを行ったところ遺構確認面を覆った山砂になった。山砂は10cmほど堆積しており、さらに掘り下げたところ、大量の大小の礫石が検出された。この面が北杜市教育委員会による遺構確認面の上面に相当する。礫石の出土した面中には、調査区全体に大小の縄文土器片が検出できた。調査区南側より深鉢形土器の胴下半部で櫛齒状条線を縱位に施し、隆帯による横S字状文を施文した土器が出土している。曾利II式と思われる(写真19-1)。この他、長さ約7cm、幅約4cmの打製石斧の刃先が1点出土した。大小の礫石を一部測量後に除去し、さらに約5cm程掘り下げて、遺構の確認を行った。その結果、東西に45cm、南北に60cmほどの土坑と調査区南側に竪穴住居跡1/2ほどを確認することができた。その際に調査区南側に一括の土器が検出されている。また、土坑はピット1として調査を行った。東側を半截後、断面図を取り、全載したのち平面図の作成を行った。確認された大小の礫石が、遺構確認面に多量に検出されたがそれがどのような理由により生じたものかは、今後の調査で明らかにしたい。来年度は、検出された土器群や、遺構確認した竪穴住居跡の調査を行う予定である。

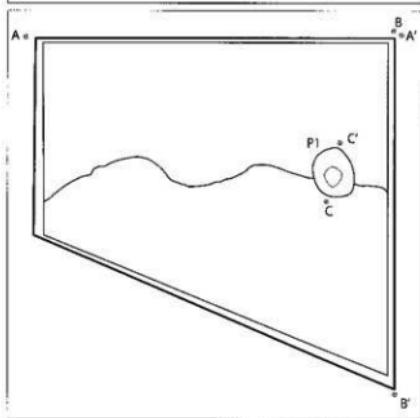
(小林寛子)



写真6 W-5グリッド 遺構確認面上面 西側から



上面の礫面検出状態



下面の透構確認面

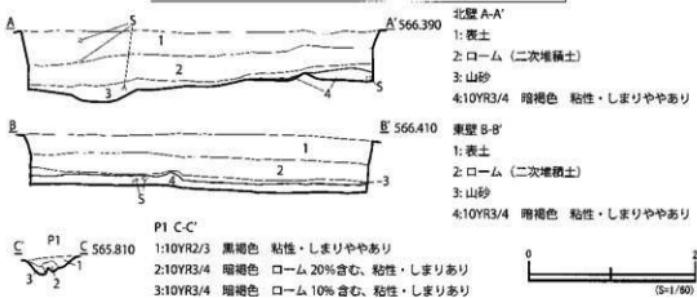


図4 W-5 グリッド 平断面図 1/60



写真7 W-5 グリッド 遺構確認状況 北側から



写真8 調査風景

X-5・6グリッド(図5、写真9～12・19)

WグリッドとYグリッドの間に設定されたグリッドである。X-5・6グリッド合わせて調査範囲内は約23.4m²である。調査はまず南側X-6グリッドから北側X-5グリッドに向かい表土除去を開始した。表土下約30cmよりローム質土約20cmと山砂約10cmが検出された。これは北杜市教育委員会が以前行った確認調査時の埋め戻しによる二次堆積土層である。地表面より全体を約60cm掘り下げを行い山砂を除去したあと、遺構確認面が確認された。さらに遺構確認面を明瞭にするため約5cm掘り下げた。その結果、図5に示したように遺構が確認された。これらは、いくつかの土坑もしくはピットと思われる落ち込みの他に、X-6グリッドの一番南側からは石垣の建て替えに伴う壊乱部分が南北に約20cm、東西に約3.5mの幅で検出された。

また、XグリッドとYグリッドにまたがるように堅穴住居跡と思われる落ち込みが確認された。Xグリッドでは東西に約2.5m、南北に約4.5mの範囲で確認された。そのため、堅穴住居跡であるかどうか確認するため、X-5・6グリッド内の一番東側の上層ベルトに沿って幅約30cmのサブトレーナーを南北に設定し、遺構確認面によりさらに約30～40cm掘り下げを行ったところ、住居の床面と思われる面と住居の立ち上がりと思われる壁を確認することができた。サブトレーナーを設定した東側壁セクションは表土、ローム(二次堆積土)、山砂の3層の下に住居覆土層が4層確認された。また、一部旋上も確認されている。来年度からはこの確認された住居跡の詳しい調査を行っていく予定である。

Xグリッドの主な出土遺物は、図5の遺物出土状態に図示した大形一括個体の土器がある。グリッド北壁際東側から同一個体と思われる土器片が直径30cm内に集中して出土している。遺物の周囲は大きめの石で固まれており、またその西側には土坑と思われる落ち込みが確認されている。この出土土器は口径約26cm、器高約18cmの浅鉢形土器で、口縁部を無文帯として、境目に陰帯を貼付して押捺し、胴部以下は備蓄状条線が施されたものである(写真19-2)。曾利ⅢないしIV式と思われる。土器片ではこの他に曾利系と思われる浅鉢形破片が出土している(写真19-5)。

石器は、X-5グリッド北側から大きさ5cmのチャートの石核(写真19-12)や、完形ではないが約4×8cmの緑色凝灰岩の乳棒状磨製石斧(写真19-6)が出土している。また、打製石斧と石礫がそれぞれ2点ずつ完形ではないが出土している。そのほかにも圓石やグリッド西側からは3～4cmの水晶製の剥片(写真19-13)が出土している。以上まだ確認状態のため詳細は不明な点が多いが、中期後葉期と思われる堅穴住居跡と土坑が重複しており、来年度の調査で詳細を明らかにしたい。

(井口真理子)



写真9 X-5・6グリッド 確認面遺物出土状態



写真10 X-5・6グリッド 一括土器出土状態

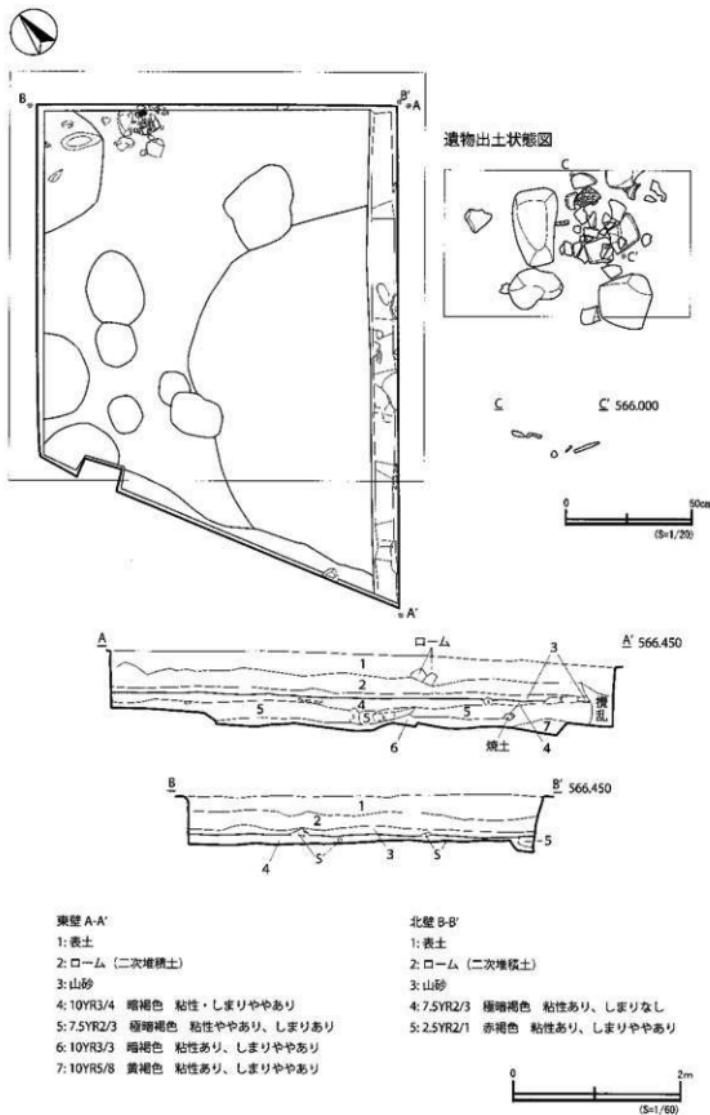


図5 X-5・6グリッド 平断面図 1/60



写真11 X-5・6グリッド 遺構確認状況 北側から



写真12 X-5・6グリッドとY-5・6グリッドのペレト土層堆積状態

Y-5・6グリッド(図6、写真13~19)

調査区の一番東側に設置したグリッドである。調査範囲は調査区内搅乱部分を境に、掘削範囲は約26.5m²、搅乱範囲は約4.1m²の計約30.6m²である。調査はまず南側から北側に向かい表土除去を開始した。北杜市教育委員会の確認調査で埋め戻されたローム質土約20cm、山砂約10cmの上面に耕作土である約30cmの表土層、計約60cmの下に遺構確認面が確認された。遺構確認面を明瞭にするため、さらに5~10cm程掘り下げたところ、図6に示した範囲にいくつかの土坑もしくはピットと思われる落ち込み、大形の円形の落ち込みが確認された。その落ち込みはグリッド内の西側に偏して検出され、東西に径約2.3mの半円形を呈する。検出された範囲はプランの約1/2と思われる。X-5・6グリッドにも東西に径約2.5m未満の半円のプランが検出されており、北側立ち上がりがほぼ一致することから、ほぼ5.4mの円形を呈する1軒の堅穴住居跡と考えられる。ほかに、この住居跡南側に切り合っている半円を呈した落ち込みと、グリッド内北東側にも同様な落ち込みを確認した。住居跡かどうかは今後の調査で判断したい。またY-5・6グリッド境界線から南に約40cmのさらに南側部分は、北杜市教育委員会によって既に発掘されているため調査は行わなかった。

グリッドの東側には、遺構確認面下約12cmのところから、南北方向に走る長さ約6m、幅1m未満、深さ約30~40cmの溝状の落ち込み(写真13・16)が確認された。内部は大形の石や小砂利が多量に敷き詰められていた(写真14)。この落ち込みを覆う上層は、図6の断面図A-A'、B-B'に示したように、10~20cm程の礫、3~6cm未満の小石を含む砂利層である。当初は道状遺構だと思われたが、小砂利や大形の石が敷き詰められていることから水を浄化する役割を果たしていたと考えられる。この調査区より南には江戸時代初頭に建てられた屋代氏館跡があり、北杜市教育委員会の佐野隆氏より、その館まで水を引くための導水施設ではないかとの指摘を受けた。出土遺物は、X・Y-5・6グリッドにまたがる堅穴住居内中央付近から大形の土器片が出土した。口縁部がキャリバー状を呈する無文で、口唇部内面が肥厚し、頸部はヒタ状の沈線を横位に巡らしたあと、6段の波状を呈する粘土紐が貼付され、胸部は縦位の櫛歯状の沈線が施された深鉢形土器で、曾利II式と思われるものがある(写真19-3)。このほか、確認面から確認された遺物は、中期中葉、藤内式・井戸尻式、中期後葉では曾利式土器の破片が出土している。今回の調査期間中には溝状遺構の調査と、図6に示した遺構・落ち込みのプランを確認せたにとどまった。来年度の調査ではX・Yグリッドにまたがるベルトを除去し、確認された堅穴住居跡の調査を行いたい。同時に周囲の住居跡や落ち込みについても調査し、グリッド全体の遺構を明らかにさせる予定である。

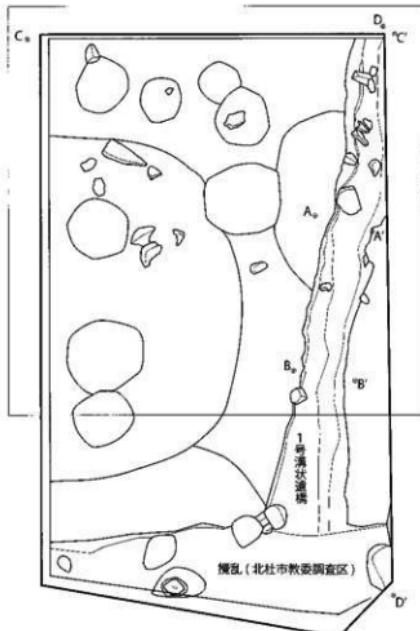
(飯島 菜)



写真13 Y-5・6グリッド 1号溝状遺構上面



写真14 1号溝状遺構 土層断面



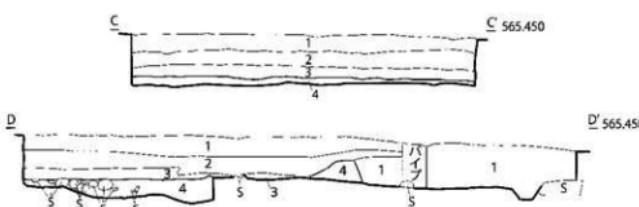
△ 1 4
S 2 5
△ 3 5

△ 565.900

- 1号溝状透構北側 A-A'
1:7.5YR2/3 極暗褐色 ローム 10%含む、
粘性ややあり、しまりなし
2:7.5YR2/2 黒褐色 6cm 未満の小砂利含む、
粘性ややあり、しまりなし
3:10YR4/6 褐色 粘性ややあり、しまりなし
4:7.5YR2/3 極暗褐色 ローム 10%含む、
粘性ややあり、しまりなし
5:7.5YR2/3 極暗褐色 3mm 程の砂利に 10 ~ 20cm
の礫含む、粘性ややあり、しまりなし

△ 1 3
S 2 S
△ 565.900

- 1号溝状透構南側 B-B'
1:7.5YR2/3 極暗褐色 ローム 10%含む、
粘性ややあり、しまりなし
2:7.5YR3/2 黒褐色 3mm以下の砂利に大きめの
礫を含む、粘性ややあり、しまりなし
3:10YR4/4 褐色 粘性ややあり、しまりなし
4:7.5YR2/3 極暗褐色 3mm以下の砂利に大きめの
礫を含む、粘性ややあり、しまりなし



北壁 C-C'

- 1: 表土
2: ローム (二次堆積土)
3: 山砂
4:7.5YR3/4 暗褐色 粘性・しまりあり

東壁 D-D'

- 1: 表土
2: ローム (二次堆積土)
3: 山砂
4:7.5YR3/3 極暗褐色 粘性・しまりあり

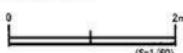


図6 Y-5・6グリッド 平断面図 1/60



写真15 Y-5・6グリッド 遺構確認状況 北側から



写真16 Y-5・6グリッド 1号溝状遺構完掘後全景 南側から



写真17 X・Y-5・6グリッドにまたがる遺構確認状況



写真18 発掘区全景(東側から)

出土遺物(写真19)

今回の調査で出土した代表的な遺物を写真で示した。本格的な遺構調査を、本年度は実施していないため、遺物の出土量はさほど多くはないが、遺構確認面からは、縄文土器片や石鏃、磨製・打製石斧、黒曜石の剥片、水晶の石核などが出土している。主要な出土遺物の概略については、各グリッドの項で説明しているので、ここでは省略するが、予想とおり、中期中葉から後葉期に属するものである。今後の調査の進展によって、遺構の所属時期等の詳細が判明すると思われる。

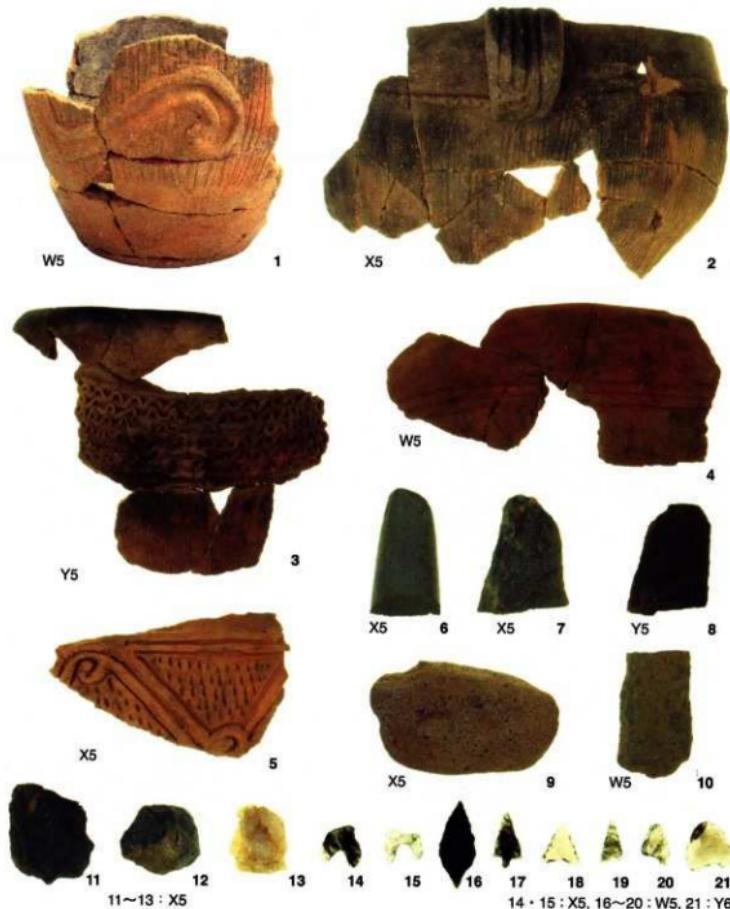


写真19 出土遺物

5. まとめ

調査地区を含めた周辺地区が圃場整備事業により、2011年度の第5次調査をもって完了することとなり、一時は諏訪原遺跡での調査継続を断念せざるをえない状況となつたが、幸い、北杜市教育委員会の斡旋により、これまでの調査区の道路を挟んだ北西側の地区が土地所有者である藤原英治さんのご厚意により発掘調査が可能となつた。前述したとおり、この地区は、藤原さんの所有地、上神取1587-1番地とその隣接地1612番地を含めて、2004(平成16)年度に遺構確認調査が行われ、多数の縄文時代中期の竪穴住居跡や土坑などが確認されていた(諏訪原遺跡第10次の調査に相当する)。したがつて、新たな調査地区としては、確実に遺構の調査が可能であり最適な条件であったといえよう。

確認調査後は遺構確認面全面を山砂で覆い、さらにその上をローム質土で埋め戻すという、手厚い保護が北杜市教育委員会によりがなされていた。この調査地区は、昨年の圃場整備事業に伴う記録保存調査のさいの駐車場、その後の工事車両や機材置き場となっていた。その関係からか、表土はきわめて硬く、掘削に難済することとなつた。しかも、表土下の遺構確認後の埋め戻し土である、山砂層とローム質土も厚く遺構確認面を覆つており、遺構確認面までの深さが、約60cmもあり、予想を超える堆土量となつた。予算的なことからすべては機械力ではなく人力に頼らざるを得ないため、前半の参加学生には酷暑の中、過度な肉体的負担をかけることになつてしまつた。熱中症などにより一部の参加学生が宿舎で短期間休養することもあったが、大事に至らなかつたのは幸いであった。

今年度は、遺構確認面まで掘り下げる目的としたため、遺構の掘削は、中世末の溝状遺構を除き、ほとんど行わなかつたが、予想とおり、竪穴住居跡や土坑、ピットなどを確認することができた。とくにY-5・6グリッド、X-5・6グリッドにまたがつて、中期の竪穴住居跡1基のほぼ全体のプランが確認できた。サブトレンチを設定して住居の探さなどを確認した(写真12・20)が、良好な遺存状態と判断された。また、確認面からは、土器や石器も多数出土しており、来年度以降の調査成果が期待されよう。

調査対象地区は広く、今後、毎年継続的な調査を実施することにより、諏訪原縄文時代中期環状集落跡の実態解明を目指してゆきたい。最後に、調査に当たつて、多くの暖かいご指導をいただいた、北杜市教育委員会の佐野 陸さん、大網信良さん、ならびに調査を快く承諾いただいた土地所有者の藤原英治さんに厚くお礼申し上げる次第である。

(山本暉久)



写真20 遺構確認面清掃風景



写真21 埋め戻し状況 12.8.18

調査参加者名簿

教 員 山本輝久(大学院生活機構研究科教授)・小泉玲子(人間文化学部歴史文化学科教授)

助 手 石井寛子(人間文化学部歴史文化学科)

大学院生活機構研究科修士課程 2年 井口真理子・飯島 茜

1年 小林寛子

人間文化学部歴史文化学科 学生

4年 會田成美・清水志保・関根 藍・中村美結紀

3年 石下翔子・大野真奈未・岡田真実・小杉知明・鈴木英里香・鈴木 悠・高田夏帆
内藤彩乃・野崎 恵・長谷川啓子・前田有美・村越令奈・室屋友里奈・山本望生

2年 芦沢優妃・小田実奈美・鈴木 花・福島唯奈・福本智子・松本麻希

1年 大越茉莉花・関矢彩音・高梨澄麗



写真22 前半参加者記念写真



写真23 後半参加者記念写真

諏訪原遺跡関連文献

佐野 隆 1996 「発掘調査速報 諏訪原遺跡」『年報一平成7年度』 北巨摩郡市町村文化財担当者会

佐野 隆 2003 「発掘調査速報 諏訪原遺跡」『八ヶ岳考古一平成14年度年報一』 北巨摩郡市町村文化財
担当者会

佐野 隆 2004 「発掘調査速報 諏訪原遺跡」『八ヶ岳考古一平成15年度年報一』 北巨摩郡市町村文化財
担当者会

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科 編 2007~2011 『山梨県北杜市明野町上神取 諏訪原遺跡発掘調
査概報 2007年度~2011年度』

北杜市教育委員会 2011 『平成23年度明野地区中山間地域総合整備事業に伴う上神取工区内遺跡調査 諏訪
原遺跡・屋代氏館跡現地説明会資料』

北杜市教育委員会 大網信良 2012 『2011年度下半期遺跡調査発表会要旨 諏訪原遺跡・屋代氏館跡』『山梨
考古』第123号 山梨県考古学協会

報告書抄録

ふりがな	やまなしけんほくとしあけのまちかみかんどり すわはらいせきはつくつちょうさがいほう						
番名	山梨県北杜市明野町上神取 谷防原遺跡発掘調査概報 2012年度						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編集者名	山本輝久・小泉玲子・井口真理子・飯島 茗・小林寛子						
編集機関	昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科						
所在地	〒154-8533 東京都世田谷区太了堂1-7 昭和女子大学 TEL 03-3411-5373						
発行年月日	西暦 2012年12月15日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号				
すわはらいせ き	やまなしけん ほくとしあけ のまちかみか んどり 1587-1	19-209 01 014	35度 48分 2秒	138度 26分 37秒	20120807 ~201208 18	約85m ²	绳文時代環状集落形成 成~崩壊過程の研究に かかる学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	その遺構	主な遺物	特記事項		
谷防原遺跡	集落跡	绳文時代	堅穴住居址状落ち込み ・土坑、中世末溝状遺 構1 中世末溝状遺構を除き、 遺構は確認のみで、正 確な数は未確定	绳文土器・石器	绳文時代中期の大規模環状集落址 で、2007年度より、昭和女子大学人 間文化学部歴史文化学科が調査主体 となって、中期環状集落形成~崩壊 に至る過程解明のため、学術発掘調 査を継続してきた。昨年度までの調 査対象地区の調査が完了したため、 本年度より新たに、道路を挟んだ北 側の隣接地区の調査を開始した。調 査の結果、堅穴住居址と思われる落 ち込みと土坑状落ち込み数箇所確認 した。来年度以降も調査を継続する 予定である。		



造構確認面全景 東側から

山梨県北杜市明野町上神取

諏訪原遺跡発掘調査概報

2012年度

発行日 2012年12月15日

発行者 昭和女子大学人間文化学部
歴史文化学科

〒154-8533 東京都世田谷区太子堂1-7

TEL 03-3411-5373

FAX 03-3411-7059

印刷 野崎印刷紙器株式会社